



目どるの近所付き合いが身を守る!! 育てよう地域の力「自主防災組織」

育てよう地域の力・広げよう「共助」の考え 自主防災組織のすゝめ

今年は、阪神淡路大震災から20年の節目を迎えた年です。自主防災組織の結成が全国的に広がったのも、阪神淡路大震災が契機でした。阪神淡路大震災では、道路・水道・電気・電話などの都市機能が麻痺し、消防などの防災機関の活動は困難を極めました。しかし、地域の人たちが自発的に初期消火や救出・救護活動、避難所の運営などを行った地区では、結果的に地震による被害や混乱を最小限に抑えることができたと言われています。

また、災害からいち早く立ち直るためにも、地域の協力が不可欠でした。

では、毛呂山町の取組はどのような状況なのでしょう。町内の自主防災組織の組織率は60・9パーセント（平成26年4月1日現在）です。この数字は決して高いものではなく、県の平均組織率85・5パーセントを大きく下回っています。

このコーナーでは、1年間に

わたり、町内の各組織の様さまざまな取組を紹介してきました。すでに結成している地区には、今後の活動の参考にしてもらい、まだ結成されていない地区には、結成へ向けてのきっかけにしてもらえればと思います。

今年も間もなく3月11日が訪ずれ、東日本大震災から4年が経過しようとしています。災害は、いつどこで発生するかわかりません。いざという時のために、普段からの地区内での繋がり（つな）を深めるとともに、地域の力を育てていきましょ。



1月17日、東公民館で行われた「防災講演会」の様子

毛呂山歴史散歩 第250回 毛呂山合併ヒストリー ～巻の3～

明治22年（1889）に誕生した山根村（合併当初は瀧野入村）では、北部地域と南部地域の調和を図り、村役場は南部の旧大谷木村、学校は北部の旧阿諏訪村に設置すると取り決められていました。しかし、山根村北部地域から南部地域の役場への往来、逆に南部地域から北部地域の学校への通学は、山間部という自然条件もあって、潜在的に不満が残っていました。

そのようななか、山根尋常小学校の老朽化、生徒数の増加により、学校の増改築の問題が起こりました。学校の位置を阿諏訪にするか、大谷木にするかで論争となり、昭和8年（1933）から協議の場を設けていましたが、村の財政も悪化していることなどから、村の

将来も考え、毛呂村との合併を決断することになりました。

その後、両村の間で合併の協議が行われ、毛呂村と山根村は合併し、昭和14年（1939）旧毛呂山町が誕生しました。

また、合併にあたり、山根村葛貫字堀口、大寺地区（現在の日高市山根地区）の25世帯は、地勢や交通などの関係から、山根村からの分離を希望し、高麗川村（現在の日高市の一部）へ編入しました。

旧毛呂山町誕生の背景には、財政面だけでなく、子どもたちの通学や地域で暮らす人びとの利便性への配慮がありました。

合併後、学校は毛呂山尋常高等小学校を小田谷地区に建てることとなりましたが、結果的に毛呂尋常小学校が東分教場、山根尋常小学校が西分教場として残りました。そして建設予定であった毛呂山尋常高等小学校の誕生は、幻となりました。



村域変更記念碑
（日高市山根地区）